

小学校図画工作科「造形遊び」題材に関わる教師支援

名古屋経済大学 人間生活科学部 教育保育学科 塚本 敏浩

はじめに

小学校図画工作科の学習内容に位置付けられた「造形遊び」は、昭和 52 年告示の小学校学習指導要領より導入され、今日に至る図画工作科の「表現」活動の一つである。

今でさえ「造形遊び」は小学校教師の間では耳慣れた言葉となったものの、実際の教育現場では、尚も変わらず実施率の低い学習内容・題材と言われている。その実態や要因については、阿部¹⁾(2017)、西川・丁子²⁾(2019)の調査研究に詳しいが、導入後 40 年を経過した現在では、導入当時のように、教師側に内在するいわゆる「造形遊びに関する理論不足」や「造形遊びの認知不足」にその原因があるとは考えにくい。むしろ、現場の小学校教師は「造形遊び」の教育的意義や重要性については、十分に理解し、認識している傾向が高い³⁾。それにもかかわらず、「造形遊び」が敬遠されがちであるのは、教師が作品評価に囚われ、活動過程評価に重きを置く「造形遊び」の学習の流れについて十分に理解できていなかったり、そのために作品づくりを主とした題材ばかりに活動の意識が取られてしまったりして、結果として「造形遊び」に着手する時間的余裕がないことなどが理由として考えられる。

以上のことから本稿では、この現状を改善するための教師支援として、「造形遊び」に取り組みやすい材料用具を使った「学習の流れ」を提案し、実際の教員研修で提示した効果的な教師支援の方法について報告する。また、教育課程を再考し、教科書題材の組み合わせに改善を加えた学習計画の立て方や現場の教師が「造形遊び」題材に取り組みやすい方策について論ずる。

1 図画工作科における「造形遊び」の変遷と位置付け

前述のように、「造形遊び」は昭和 52 年告示の小学校学習指導要領・図画工作科に「造形的な遊び」という名称で低学年に導入され、「遊び」を学びの主体とした幼稚園・保育園における造形活動との繋がりを基本理念としたのが始まりである。そして、これまでの幾多の改訂の中で、中学年、高学年へと対象を広げ、現在では全ての学年に位置付けられている。また、導入当時から「造形遊び」は、図画工作科においてそれまで主流とされてきた「作品づくり」を主たる目的とする「製作」活動から転換し、作品づくりを目的とせず「過程」を重視する体験活動へと、新しい指導観を図る学習として位置付けられてきた。このことこそが、当時は教師の「造形遊びへの不理解」へと繋がってきたといえるが、現在に至ってはそのような問題は解消され、概ね「造形遊び」の教育的意義は理解されてきている⁴⁾と言える。

次に、現在の小学校学習指導要領・図画工作科における「造形遊び」の位置付について、整理する。

周知の通り、図画工作科の内容は、「A 表現」「B 鑑賞」及び〔共通事項〕で構成しており、「A 表現」には(1)と(2)の二つの項目を設け、(1)は、「A 表現」を通して育成する「思考力、判断力、表現力等」として発想や構想に関する項目、(2)は、「A 表現」を通して育成する「技能」に関する項目という構成としている。そして、それぞれアとイの二つの事項を設け、(1)と(2)のどちらの項目も、アは「造形遊び」をする活動に関する事項、イは、絵や立体、工作に表す活動に関する事項を示している⁵⁾。(【図 1】参照)

ここで、着目すべきは、以下の解説である。

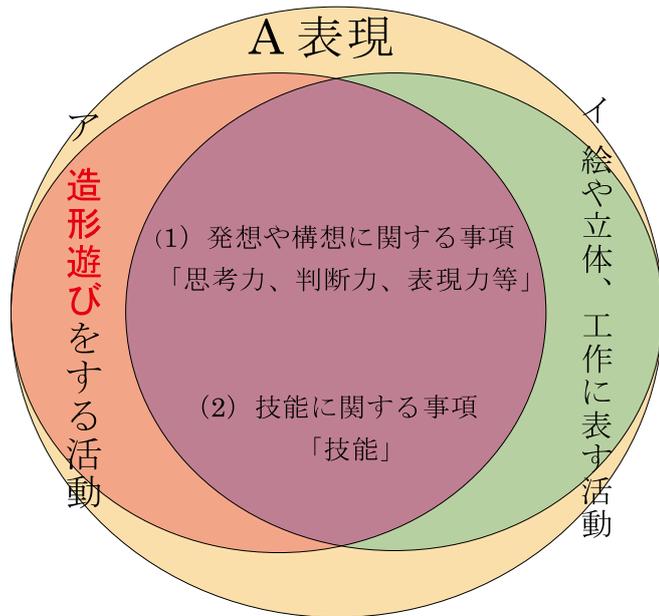
この造形活動は、大きく二つの側面に分けて捉えることができる。一つは、材料やその形や色などに働きかけることから始まる側面と、もう一つは、自分の表したいことを基に、これを実現していかうとする側面である。⁷⁾

この前者の側面が、「造形遊び」を理解していく上で重要であり、教師が実際に「造形遊び」題材に取り組む上で、活動そのものに具体性を持たせる必要がある。同解説では、さらに、以下のよう説明されている。

児童は、材料に働きかけ、自分の感覚や行為などを通して形や色などを捉え、そこから生まれる自分なりのイメージを基に、思いのままに発想や構想を繰り返し、手や体全体の感覚などを働かせながら技能などを発揮していく。これは遊びのもつ能動的で創造的な性格を学習として取り入れた材料などを基にした活動で、この内容を「造形遊びをする」とし「A表現」の(1)ア及び(2)アで取り扱うこととした。⁸⁾

本稿では、材料用具の工夫に関する提案として、特に上記下線部に関わる具体的な活動について報告するが、ここで、教師が「造形遊び」を扱う上で、意識したいことは、「造形遊び」は、結果的に作品になることもあるが、始めから具体的な作品をつくることを目的としない⁹⁾ことである。

このことは、特に、およそのテーマや目的を基に作品をつくらうとすることから始まる「絵や立体、工作に表す」活動¹⁰⁾と区別し、この「造形遊び」の特性を生かしながら、指導を工夫する必要があることを教師は理解しておかなければならない。



【図1】小学校学習指導要領での「造形遊び」の位置付け⁶⁾

2 「造形遊び」題材における教師支援

以下に、実際の教育現場で図画工作科の授業を担当する小学校教師を対象に行なった現職教育研修における教師支援の実際について紹介し、その効果について考察する。

(1) 教師支援の対象と内容

愛知県A市立小学校4校において、図画工作科の授業を担当する教師80人を対象に現職教育研修として、「造形遊び題材を通した授業力向上と教師支援」と題し、「造形遊び」における材料用具と学習の流れの工夫についての研修及び支援を行った。

(2) 教師支援の時期

2021年6月から12月下旬にかけて、各校2～4時間研修を1～2回。

(3) 教師支援の実際①

「造形遊び」の指導の根幹に関わることとして、「造形遊びとは一体どのような学習なのか」を理解してもらうことが重要である。そのために、【図2】のような例を挙げ、説明を行なった。

一般的に図画工作という科目自体が「指導法が分かりにくい」「評価が分かりにくい」「教材の扱い

が分かりにくい」等の声が聞かれることから、「造形遊び」の位置付けを一般化して理解できるように、体育科の学習を例に置き換えた。そこでは、「ボール運動（サッカーやバスケットボール等）」のように、競技を目的とする学習ではなく「自分の心と体に向き合い、体を動かす楽しさや心地よさを味わったり、体力を高めたりすることを目的とする学習（行為そのものの学習）」に該当する「体づくり運動」のような学習が「造形遊び」に該当するものであるとした。前述の学習指導要領の解説にもあるように、造形活動の一つの側面である「材料やその形や色などに働きかけること」は、まさに体育科の「体づくり運動」において「自分の心や体に向き合うこと」に一致するであろう。そして、実際にA市で使われている教科書『図画工作（N出版社編）1・2年下』で取り扱われている題材（「体づくり運動」的な題材）として、「しんぶんしとなかよし」を紹介した。また、ボール運動的題材として、テーマや目的を基に作品を作ろうとすることから始まる題材「くしゃくしゃぎゅ」を例に紹介した。

以上のように、他教科（特に体育科といった技能系科目）を例に置き換えた題材の位置付けの解説は、教師の「造形遊び」そのものの理念を伝えるための教師支援として、非常に好評であり、適切であったと考える。

次に、「造形遊び」の基本的な学習の流れを理解し、子どもにとって身近で、且つ、材料の特性や形に働きかけやすい方法として、「新聞紙」を使ったワークショップを行なった。ここでは、「新聞紙と出会う」ことから始め、目的的に作品づくりに陥らないようアプローチを工夫した。ワークショップの手順と詳細は、以下【表1】の通りである。

【表1】「新聞紙を使ったワークショップ」の流れ

- ①「新聞紙」と出会う。
新聞紙を使っていろいろな遊びをする。
(例1) 新聞紙を使って「一番長い紙を作ろう」←紙素材への理解を深める活動
(例2) 新聞紙で空手ごっこ「破り名人になろう」←同上
- ②「新聞紙」を使って、やりたいことを自由にする。
数々の造形要素の体験……破る・丸める・ちぎる・ねじる・つなげる等
- ③「見立て遊び」をする。
②で様々に体験し、手を加えた「新聞紙」がどんな形やイメージに変化してきたか、「見立て遊び」を行う。
(例1) 丸めた新聞紙が「おにぎり」に見えてきたよ。
(例2) 破った新聞紙とねじった新聞紙を並べてつなげて見たら、にんじんや大根みたいに見えてきたよ。



【図2】「造形遊び」を体育科の学習に例えると

④様々に手を加えた新聞紙を好きなような形やものに見立ててみる。

材料：カラービニール、モール、油性カラーペン、ビニールテープ、セロテープ、ガムテープ、色紙……等

はじめに、私たちにとって身近な材料と言える「新聞紙」と出会うことから始まる。しかし、昨今の子どもたちにとって、社会状況・生活環境の変化から、「新聞紙」は必ずしも身近な材料とは言えない。情報通信技術が発達した現在の社会では、多くの家庭では「新聞」に触れる機会が減り、広告チラシも含めて、「新聞」という特殊な「紙」素材を知らない子どもたちも多いからである。実際に、現場の若い小学校教師は、「新聞紙」という紙素材の特性についてあまり知らない様子であった。「新聞紙」は印刷される工程において、輪転機を使って大量に短時間に印刷する必要があるため、紙の流れ目方向に向かって強い特性がある（紙の目に向かって繊維が強い）。このことから、他の紙に比べて、縦向きに裂けやすく、手で簡単に带状に短冊をつることができる。このような特性を体で（材料の特性と向き合う）感じ取るためには、いろいろな遊びを体験することが重要となる。（【図4】ワークショップの流れ①）そして、「新聞紙」は「破る」だけでなく、様々な手を加えること（破る・丸める・ちぎる・ねじる・つなげる等）ができることに気付かせ、体験に繋げる。（【図4】ワークショップの流れ②）



【図4】「ワークショップ」流れ①②の様子

次に、②で様々に体験し、手を加えた「新聞紙」がどんな形やイメージに変化してきたか「見立て」活動を行った。「見立て」とは、元来乳幼児が身近にあるものを別のものに見立て、イメージを膨らませながら行う「遊び」の行為のことである。この行為は先に触れた「造形遊び」の基本理念にも関わるもので、「遊びのもつ能動的で創造的な学習」と言える。【表1】の③の例あるように、子どもの視点に立ち返り、「見立て遊び」をすることで、「材料に働きかけ」「自分の感覚や行為などを通して形を捉える」ことを理解したい。（【図5】ワークショップの流れ③）。



【図5】「ワークショップ」流れ③の様子

そして、これら一連の活動の最後④として、見立てたものを好きなように形にしていく。ここでは、具体化した作品としているが、あくまでも「結果的に作品になることもあるが、始めから具体的な作品をつくることを目的としていない¹¹⁾」ことが重要なポイントである。仮にこの行為が「見立て遊び」を通じた活動ではない場合、多くの子どもたちが、始めから「僕は新聞紙を丸めてダンゴムシをつくらう」とか「私は新聞紙をたくさんちぎって、お菓子をつくりたいな」というように、目的的に作品づくりに陥ってしまう危険性が非常に高い。それはこれまでの図画工作科の学習のほ

とんどが、造形活動の二つの側面の「自分の表したいことを基に、これを実現していこうとする側面¹²⁾」を基にした活動であったからである。以上のようなワークショップを通して理解を深めてほしい点は、この活動の「流れ」の方向についてである。

(4) 教師支援の実際②

次に、N出版発行、図画工作科教科書『ずがこうさく1・2下』の題材「しんぶんしとなかよし【図7】」について、『愛知県A地方小学校教育課程【表2】』を参照しながら、活動の流れと支援の工夫について考え、教師支援に取り組んだ。

本題材「しんぶんしとなかよし」の場合、大きく区分して3つの学習の場面が存在する。

- ①新聞紙と出合う場面
- ②どのように活動するか考える場面
- ③活動を振り返る場面

である。(【表2】朱下線部参照)

この「場面ごとに、教師がどのような支援の工夫が考えられるかが一番難しい」との声が聞かれたため、具体的な支援の方法をまとめた。【図8】「活動の流れと支援の工夫」参照。

「①新聞紙と出合う場面」では、「思いついたことから試す」のだが、子どもたちの中で、なかなか「思いつかない」場合には働きかけの方法を提示する支援も必要であると考え。この働きかけというのは、「破る」「ちぎる」「ねじる」などの「行為の具体」である。もちろん、「造形遊び」には、「遊びのもつ能動的」行為が重要であるが、現実の教育活動の中では、こういった働きかけによって、「こんな方法があるんだ」「こんなことをしてもいいんだ」という気づきのきっかけを与えることは、教師の支援として大切である。

「②どのように活動するか考える場面」では、①同様に、「活動の方向づけ」をすることも大切である。この「方向づけ」は①のような紙の「加工」による行為を基に



【図6】「ワークショップ」流れ④の様子



【図7】N出版教科書「しんぶんしとなかよし」¹³⁾

【表2】愛知県A地方教育課程¹⁴⁾より①

時	内 容	備 考
1・2	<p>○ 新聞紙に全身で関わりながら、造形的な活動を思いつき、いろいろな形や触った感じなどを捉えながら、空べたり、破ったり、ねじったりするなどして、試しながら活動を工夫してつくる</p> <p>○ <u>たくさん新聞紙に出会う</u></p> <p>○ いろいろな形や触った感じなどを基に、自分のイメージをもちながら、新聞紙を空べたり、まったり、丸めたり、破ったりし、紙の大きさや感触などを全身で味わい、<u>どのような活動ができるか考える</u></p> <p>○ 感覚や気持ちを生かしながら、紙の感触を味わい、活動の仕方を考える</p> <p>○ 新聞紙に十分に慣れるとともに、空べたり、破ったり、まったり、丸めたり、ねじったりするなど手や体全体の感覚などを働かせ、思いついたことを試す</p> <p>○ いろいろな形や触った感じなどを基に、<u>自分のイメージをもちながら、活動したことや活動の中で気付いたことなどを友人と伝え合う</u></p>	<p>下P18・19</p> <p>新聞紙・セロハンテープなど</p>

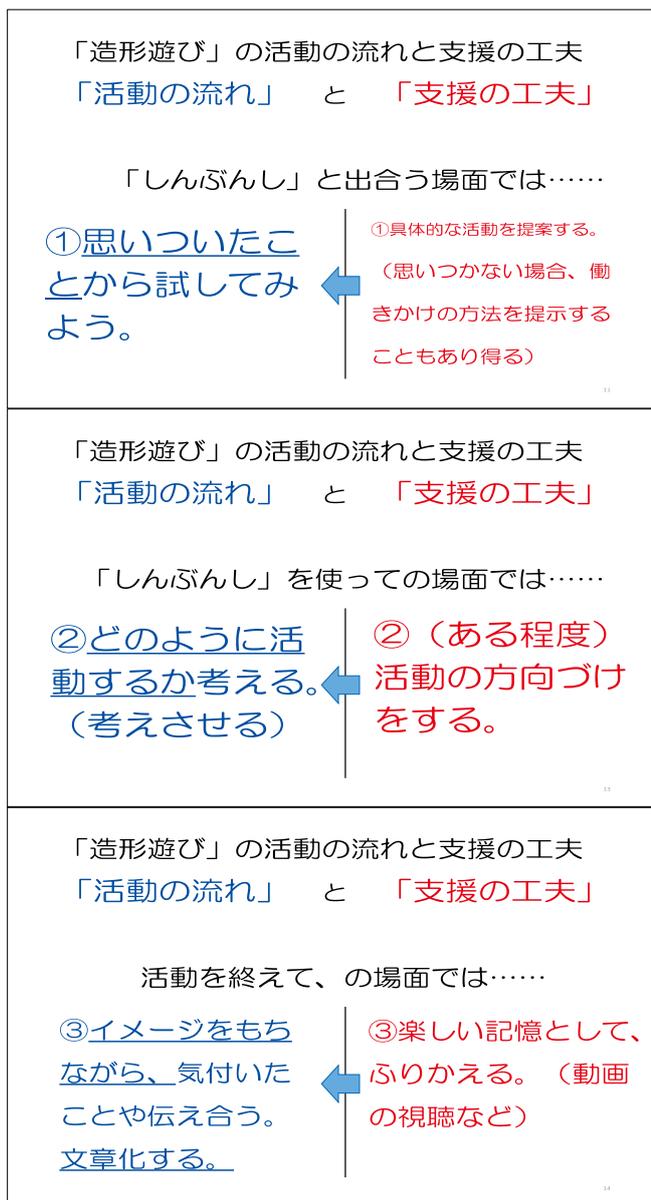
留意事項
 ・ 教室、廊下、体育館など活動を保障する場所を確保しておく

して、「並べる」「つるす」「組み合わせる」などの「二次的な行為の具体」である。これら二次的な行為を子どもたちが考えつくには、活動できる環境（実際には教室や図工室）の準備が必要である。例えば、「つるしたい」と考えた時に、天井や上から「つるしやすい」環境が整っていないと、「このように活動したい」と考えても、実際に子供がその活動には移りにくいであろう。また「並べたい」と考えても、十分に新聞紙を広げて並べられる広さが確保されていないと、能動的に遊ぶことは難しいだろう。こういった点を解決するには、現実的な教育環境が恵まれていないと理想的な「造形遊び」の取り組みは達成しにくいと言えるが、この点を考慮しつつも、置かれた学校環境の中ででき得る活動の「方向づけ」を提示することが、結果的には子どもたちの能動性を伸ばすきっかけになると考える。

「③活動を振り返る場面」では、一般的な鑑賞活動の方法として、文章化したり、友達同士で言葉で伝え合ったりすることが多く行われている。しかし、「遊び」という行為に客観的な意味付けを行ったり、文章化したりすることは時として、子どもたちの「遊び」を難しく学習化してしまう恐れもあると考える。また阿部（2020）は、以下のように述べている。

「振り返り」を目的に製作の時間を割いて文字化したり、発表させたりすることに大きな意味はありません。当日、記録した動画や写真を後日、鑑賞することで楽しい記憶として振り返るほうが意味があるように思います。¹⁶⁾

このことから、本題材では、情報機器の活用による振り返り活動を提案する。昨今の教育現場では、当たり前のように使われているタブレット端末やデジタルカメラによって、写真はもちろん、動画として記録した様子を活動のまとめとして、クラス全員で視聴し、互いにどんな活動をしていたか、見比べることは、子どもたちにとって非常に楽しい記憶となるだろう。また実際に「遊び」に没頭している子どもたちは、他の児童の活動にはあまり視点が向かないことが多く、そういった意味でも動画記録の活用は、全体の振り返り活動や「遊び」の共有に有効であると考えられる。また教師は、記録の際、ピンポイントに一番よいシーンだけを切り抜いて撮影しがちになってしまうが、昨今のデジタル機器を有効に活用するのであれば、定点カメラを使って、授業全体が映るように、活動の一部始終を撮影したい。現在の動画は編集やトリミングもしやすく、場面の拡大等も非常に手軽にできるからである。このようなデジタル技術を「造形遊び」における活動支援に大いに使っ



【図8】 活動の流れと支援の工夫

ていきたい。

(5) 教師支援の実際③

先に述べた「造形遊び」題材の実施率がそもそも低い現状を改善するためには、前述の①②のように、「造形遊び」題材自体に工夫を加える以外に、「造形遊び」題材以外の題材、つまり「絵や立体、工作に表す活動」の題材を教育課程上効果的に組み合わせる方法で学習計画を立てることに着目した。

以下に、その実践事例と教育課程の工夫例について述べる。

N出版発行、図画工作科教科書『ずがこうさく1・2下』を例に題材を見てみると、支援②で例に挙げた「しんぶんしとなかよし」に続く題材として、次ページには「くしゃくしゃぎゅ」という「立体」題材がある。(【図9】、【表3】参照)

この題材は、「紙をくしゃくしゃにしたり、自由に形を変えたりして、くしゃくしゃにした形から思いついたものを立体に表す」題材であるが、【表3】の教育課程において、学習の内容(流れ)を見ると、活動内容が先の「しんぶんしとなかよし」に重なる部分が多いことが分かる。「くしゃくしゃぎゅ」は「立体」の題材なので、「自分の表したいことを基に、これを実現していこうとする側面」を持つ題材であり、

「テーマや目的を基に作品をつくらうとすることから始まる」題材であるが、導入部分は、「造形遊び」題材と同じく、(この題材だけでなく、図画工作科の題材については全てにおいて言えることだが)「材料と向き合い、形や素材に働きかけることから始まる」のが望ましい。このことをうまく活用することで、昨今の図画工作科の悩みの一つとされている授業時間数削減の問題にも対処できるのではないかと考える。また、指導する教師側に「造形遊び」の位置付けについての不理解がまだ根強いことは先に述べたが、このように、二つの側面をもつ「造形遊び」題材と「絵や立体、工作に表す活動」題材を並べて指導することで、題材を通して子どもたちに身に付けさせたい資質能力について、教師があらためて意識し、それによる評価観点の重要性や指導法について、より理解を深めるきっかけになるのではないかと考えた。

そこで、本稿では、教師支援③として、教育課程や学習計画の再構成について考えたい。表4は愛知県A地方教育事務所管内で使用している教育課程の題材を筆者が独自に分析し、関連性を持たせて図にまとめたものである。朱の矢印で結ばれた題材同



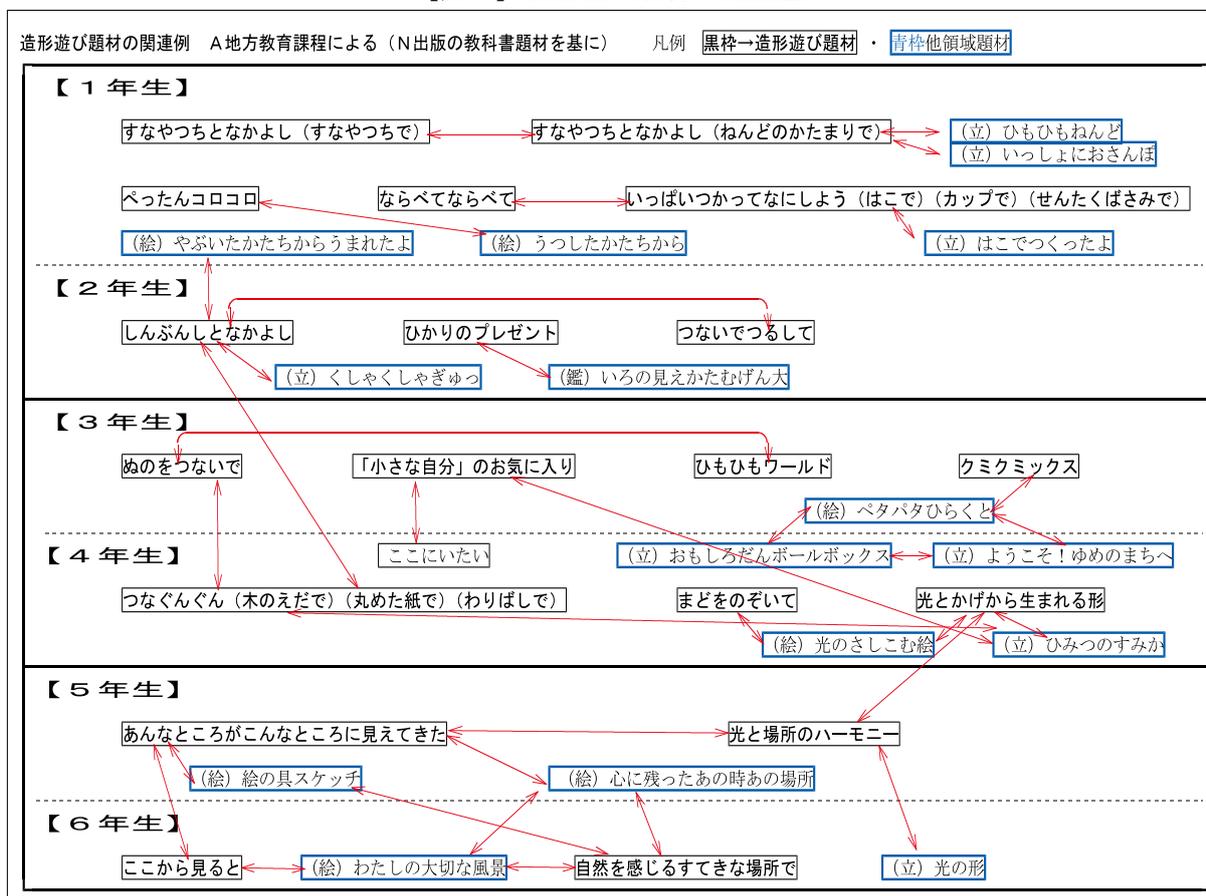
【図9】N出版教科書「くしゃくしゃぎゅ」

【表3】愛知県A地方教育課程より②¹⁵⁾

単元名	11 くしゃくしゃぎゅつ (4時間)	立体	10月
目標	<ul style="list-style-type: none"> 紙をくしゃくしゃにしたり、くしゃくしゃにした紙から思いついたものを表したりするときの感覚や行為を通して、触った感じやいろいろな形や色などに気付き、表したいことを基に表し方を工夫して表すことができる くしゃくしゃにする紙の感触や形から感じたこと、想像したことから、表したいことを見つけて、どのように表すかについて考え、自分たちの作品や紙の感触などの造形的なおもしろさや楽しさ、表したいこと、表し方などについて、自分の見方や感じ方を広げることができる つくりだす喜びを味わい、くしゃくしゃにした紙から思いついたものを立体に表す学習態度に楽しく取り組もうとする 		
時	内	要	備考
1	<ul style="list-style-type: none"> 紙をくしゃくしゃにすることを体全体で楽しみながら、感触やできた形から発想し、いろいろな形や色、触った感じなどを表えながら表し方を工夫して立体に表す 触った感じやいろいろな形や色などを基に、自分のイメージをもちながら、紙をくしゃくしゃにして、感じの变化を味わい、表したいことを考える 好きな形や色を選んだり、表したいものの形や色を考えたりしながら、紙を袋状にして中に新聞紙などを詰めたり、紙の形をさらに変えたりし、表し方を考える 		下P20・21 新聞紙・ひも・リボン・モール・クラフト紙・紙ひも・お花紙・木工用接着剤・両面テープ・両面の絵の具・ペン・はさみ・のりなど
2・3	<ul style="list-style-type: none"> 大きな紙、ひも、のりなどの接着剤などに十分に慣れるとともに、手や体全体の感触などを働かせ、縛って形を変えたり、材料を貼ったりして、表現を深める 		
4	<ul style="list-style-type: none"> 触った感じやいろいろな形や色などを基に、自分のイメージをもちながら、作品の感触を全身で味わったり、お互いに見せ合ったりして、楽しさを感じ取る 		
留意事項			
<ul style="list-style-type: none"> 袋につめる作業は、袋が舞うことを考慮し、窓を開けるなど換気に留意する 紙片が散らかりやすいので、ほうきとちり取りを用意し、すぐに片付けられるようにしておく 下P83「つかって みよう ざいりょうとようぐ」を参照して指導する 			

士は、教師側の指導方法の工夫によって、互いの題材を連動して取り扱うことができるものを表している。つまり、語弊のないように言えば、この題材同士は、指導方法、指導内容、指導時間を工夫すれば「抱き合わせて実施することができる題材」ということになる。しかし、ここで、指導者が注意すべきことは、題材を連動させることはできても、題材を「合体」させて、一つの題材として実施してしまうことのないようにしなければならないことである。これまでも述べてきたように、「造形遊び」の位置付けの理解が不足している教師は、題材を合体させて活動を行なってしまうと、結局は、二つの側面のうち、「材料やその形や色などに働きかけることから始まる側面」を飛ばしてしまい、「自分の表したいことを基に、これを実現していこうとする側面」だけで題材を扱ってしまうからである。つまり、作品づくりを目的にした活動で終始してしまうということである。ここに「造形遊び」が定着しない根本的な原因が内封していると言えるが、似た材料用具を取り扱い、学習が一連の流れに沿っている題材は、このような工夫を施すことで、より「造形遊び」を苦手とする教師にとっては、指導がしやすく、活動に取り組みやすくなるのではないかと考える。

【表4】造形遊び題材の関連図



おわりに

本稿では、図画工作科教育の現場において避けられがちな「造形遊び」について、その原因を踏まえ、問題点を改善するための教師支援として、「造形遊び」に取り組みやすい材料用具を使った「学習の流れ」を取り上げ、実際の教員研修で提示した効果的な教師支援について報告した。また、教育課程を再考し、教科書題材の組み合わせに改善を加えた学習計画の立て方や現場の教師が「造形遊び」題材に取り組みやすい方策について提案した。その結果、現場の教師からは、「造形遊びの

基本的な理念について改めて再確認することができ、今後造形遊びをもっと大切に取り組みたい」や「造形遊びは時間だけが裂かれ、取り扱いにくいイメージがあったが、他の題材と連動して取り扱うことで、取り組みのハードルが下がった」など、「造形遊び」について再認識する声が聞かれた。本稿では、授業に取り組むための教師支援としての報告までとしており、今回提案した工夫や指導法を取り入れた実際に授業実践については紙面の関係で取り上げることができなかつたため別稿にて論じていきたいと考える。そして、引き続き「造形遊び」に関する実践的な研究に取り組み、その重要性について模索していきたい。

注・引用文献

- 1) 阿部宏行『「造形遊び」が定着しない要因の考察 (1) -学習指導要領と図画工作の教科書-』美術科教育学会誌第 38 号, 2017, pp. 1-11
- 2) 西川史織, 丁子かおる『小学校図画工作科における「造形遊び」についての調査研究-学校教育現場に定着しない要因と児童に育つ力-』和歌山大学教育学部紀要. 教育科学, 2020, pp. 41-49
- 3) 前掲書 2) , pp46-48
- 4) 同上
- 5) 文部科学省『小学校学習指導要領 (平成 29 年告示) 解説 図画工作編』, 2018, p. 20
- 6) 奥村高明『よくある質問ー「造形遊び」って何?』日文 HOME .Web マガジン. 学びと美術 Vol. 35, 2015
<https://www.nichibun-g.co.jp/data/web-magazine/manabito/art/art035/> (2022. 2. 28 確認) に掲載された「造形遊び」の位置付けイメージ図を参考にして、独自に作成したものである。
- 7) 前掲書 5) , p. 21
- 8) 同上
- 9) 同上
- 10) 同上
- 11) 同上
- 12) 同上
- 13) 小学校図画工作科教科書『ずがこうさく 1・2 下』日本文教出版, 2020 年, pp18-19
- 14) 愛知県愛日地方小学校教育課程, 『図画工作』2020, p. 1-2 図 21
- 15) 愛知県愛日地方小学校教育課程, 『図画工作』2020, p. 1-2 図 25
- 16) 阿部宏行「図工を通して子どもがもっと好きになる評価の ABC」日本文教出版, 2020 年, p. 33

謝辞

本研究を進めるにあたり、教員研修、教育実践にご協力いただいた尾張旭市立渋川小学校野田恵美校長先生始め、各先生方に、ここに謹んで感謝を申し上げます。